

イエス様の頭に 香油を注いだ女性

マタイ26章6～13節
2022年3月27日
松田 基子 師

受難節に入り、第四主日を迎えました。
イエス様の十字架への道行きは、日を追って
迫ってきました。イエス様は、弟子たちに、
『ご自身は、十字架に架かるけれども、必ず
復活して、人類に救いの道を拓く使命を果たし、
神様の御許、永遠の世界に帰り、神様の
右の座に着き、世を裁く権威を得て、神様が
お遣わしになる時、必ずまた、再臨される』
こととお語りになりました。

そして弟子たちが、その間、
『キリスト者故に受ける困難や、迫害に
耐えて、イエス様の再臨を待つように』
と語られました。しかし、弟子たちは、いっこう
に危機感はなく、
『今の生活が何時までも続く』
かのように、思い込んでいました。そんな彼ら
に、イエス様は、マタイ26章2節を見ますと、
あらためて言われました。

「あなたがたも知っているとおりに、2日後は
過越祭である。人の子は、十字架につけ
られるために引き渡される」
と、弟子たちの心を揺さぶり、目を覚まさせるた
めに、迫ってきている危機を訴えられました。

過越祭を2日後に控えているという事は、水
曜日の事です。イエス様は、過越祭に屠られる
羊のように、世の罪を取り除く、神の子羊として、
十字架に架かり、人類の罪を贖われるのです。
一方、イエス様を十字架に架けようとしていた人
の事が、3節から、記されています。

「そのころ、祭司長たちや民の長老たちは、
カイアファという大祭司の屋敷に集まり、計略
を用いてイエスを捕らえ、殺そうと相談した」
とあります。イスラエルの当時の政治体制と言
いますのは、ローマ帝国の支配下に置かれた

属領でした。地中海沿岸のカイサリアに、
ローマ総督を総司令官として、ローマ軍が駐留
し、ヘロデの3人の息子たちに、領主の地位が
与えられて、治められていました。

そこでは、ローマに反旗を翻さない限りにお
いて、属領の宗教体制による統治が認められて
いました。イスラエル人の具体的な日常生活
は、宗教議会であり、サンヘドリンと呼ばれる、
70人議会に委ねられていました。サンヘドリン
は、エルサレム神殿の大祭司を議長として、祭
司24名、長老と呼ばれる地方共同体の指導者
24名、律法学者22名の、70名の議員から構成
されていました。

三節に記されています祭司長達と言いますの
は、貴族で、祭司階級の代表者達であり、エル
サレム神殿体制に於いて、祭儀、財政、警察を
統括する、内閣の役割を担った人達です。
10人程度居り、サンヘドリンの中心的役割を担
いました。民の長老達は、大土地所有者であり、
貴族階級に属していました。当時のイスラエル
においては、宗教政治が国の政治でした。ここ
に内閣級の人々が、宗教の最高の責任者であ
る大祭司の屋敷に集まって、彼らにとって重要
な相談を始めました。

それは、ここ数年、自分達が安泰を得て居る
宗教、政治体制を、揺るがす人物についてであ
りました。

『民衆に神の愛を説き、人望と期待を
得て居る、あのガリラヤのイエスと言う
男を、何としてでも捕らえて、殺してしまう』
という相談でした。彼らは、イエス様を、
『自分達の宗教体制を揺るがす、危険人物』
として見ていました。

当時のイスラエルの信仰はと言いますと、

『神殿の上層部は、権力に驕り、
私腹を肥やしていました』

一方民衆は、

『律法主義の犠牲になって、律法監視社会
の中で、律法に縛られて、心の自由は

ありませんでした』
神様の御心とは、およそかけ離れたイスラエル世界になっていました。

神様は、その様なイスラエルに、ご自身の御心を教え、表すために、神様の実体を表す、御子イエス様を、真のメシア、救い主として、イスラエルに誕生させられました。

イエス様は、
『神様の御心は、全ての人々が愛し尊ばれる事であり、そのために心から、神様を愛し、御心を求め、聞き従って生きる』

事を教えられました。イエス様は教えられたばかりでなく、律法社会から

『あれは、律法を守らない者達ではないか。神様の祝福は受けられない罪人だと、レッテルを貼られた人々に近づき、神様の愛で彼らを愛し、友となられました』

彼らはイエス様の愛によって変えられました。民衆はイエス様から愛され、イエス様を敬い、慕いました。民衆はイエス様がメシア・救い主であることを期待しました。ローマの圧制に苦しむ民衆は、ローマからの解放者として、かつてのダビデのように、神様の愛と力に満ちた、メシア、救い主が、約束の通り、ダビデの系譜から、過越祭の時に、現れる事を期待しました。祭司長たち、民の長老達も、その事は良く知っておりました。過越祭の時、エルサレムは人口が倍になるほど人で溢れます。ローマ総督ピラトも、暴動監視のために、カイサリアからローマ軍を引き連れて、エルサレムに来ていました。

その様な状況の中でイエス様を捕らえるなら、民衆が暴動を起こすかも知れません。そんな事になったら、自分たちの責任が問われます。そこで、彼らの一致した意見は、

「祭りの間はやめておこう」

でした。彼らがそんな相談をした日、イエス様は、弟子達を連れて、エルサレム郊外のベタニアに行かれ、重い皮膚病の人、シモンの家の食卓に招かれて居られました。重い皮膚病は、

その病発症中は伝染力があり、患者は町や村の中で、生活することは、律法で禁じられていました。村人の中で生活が出来、食卓に人を呼ぶことが出来るのは、完治している証拠ですが、それでも尚、人々は、

「重い皮膚病の人」

と言う、呼び方を変えず、呼び続けていました。シモンは多分、イエス様に癒して貰ったのだと思われます。シモンはもう、既に完治していたにも拘わらず、

「重い皮膚病の人」

と言う、レッテルを剥がしては貰えませんでした。人々は、そのシモンをその様な目で見えていましたが、イエス様は、十字架の死という、耐え難い苦しみを前にしても、なお、そのシモンの好意を受け止めて居られました。

しかし、一緒に出かけた弟子たちは、イエス様ご自身から、

「2日後には十字架につけられるために引き渡される」

と言う、穏やかならぬ言葉を聞きながら、少しも真剣に、そのことについて考えようとはしていませんでした。周りの誰も、イエス様の心の苦しみを、受け止めようとはしていません。皆、自分の事で心が満杯でいる中に、たった一人の女性がイエス様の苦しみを感じ取っていました。この女性は、弟子たちの会話からでしょうか、イエス様が、十字架に架かれる覚悟であられる事を聞いて、心を痛めていました。

彼女はイエス様に会って、神様の本当の愛を知り、イエス様からの愛を貰って、自分が解放され、自分で自分を喜べる様になりました。自分の人間性をこれ程までに、取り戻して下さったイエス様、生きる力の源であるイエス様が、いま、苦しんで居られるのに、何かをせずには居られませんでした。彼女は、今、何をすべきかを知ることができました。彼女はまた、決断できる人でした。多くの人は、熟慮の名の下に、時間の流れに、決断出来ない儘、一生の後悔をするということが起こります。彼女の時を見定めた

決断とは、何だったのでしょうか。それは、自分の一番の宝物をイエス様にお捧げすることでした。彼女は、イエス様がシモンの家の食卓に、就かれた事を聞くと、宝物をもって、シモンの家に急ぎました。

7節に、

「一人の女が、極めて高価な香油の入った石膏の壺を持って近寄り、食事の席についておられるイエスの頭に香油を注ぎかけた」

と記されています。この女性の宝物は、石膏の壺に入った、極めて高価な香油でした。それをイエス様の頭に注ぎかけたことには、彼女なりの、心一杯の思いがありました。当時の丁寧な接待の仕方は、中央に御馳走をならべたテーブルが置いてあって、その周り三方向に、幅広い、三人が横になれる位の長いすが置かれ、残りの一方向から、給仕をするような配置で、客は左肘を突いて、横寝になり、くつろいで、右手で御馳走を取って食べたそうです。

イエス様がその様な体勢で居られることは、女性にとって、高価な香油を注ぐのに都合が良かったと思われます。マタイは高価な香油とだけ記していますが、この行為は、マルコ福音書にも、ヨハネ福音書にも、記されています。これらの平行箇所を読みますと、高価な香油は、イスラエルから遠く離れた、ネパールや、チベット高原からの輸入品で、ナルドの香油と呼ばれ、量は1リトラ(326g)です。油の比重を考えますと、1.5カップ位の量です。頭に注いだと言っても、殆どは土間に流れ、部屋中に、家中に良き香りが漂ったことでしょう。女性にとって、この行為はイエス様に対する信仰の告白でもありました。メシアとは、油注がれた者という意味です。油注がれた者には、神様の力が注がれることを意味しており、大祭司や、王に対して油を注ぎ、メシアの称号を与えました。

神様がダビデに、永遠の王座を約束されてからは、メシアと言う称号は、ダビデの系譜に現れるイスラエルの救い主という固定した、称号にな

りました。彼女はイエス様に対して、メシアの確信があったと言う事です。彼女はエルサレムの近郊に住んでいて、神殿体制側が、如何にイエス様を危険視して、殺意を抱いているかを肌で感じていたに違いありません。その点、弟子たちは、エルサレムから遠く離れたガリラヤで、危機感が乏しかったと思われます。そんな弟子たちは、この女性の行いに腹を立てました。

8節を見ますと、

「弟子たちはこれを見て、憤慨して言った。

『なぜ、こんな無駄使いをするのか。

高く売って、貧しい人々に施すことができたのに』

と言っています。弟子たちにとって、女性の行為は、大変な無駄遣いに思われました。

マルコ福音書には、計算高い弟子たちが、その値段は、300デナリオンに見積もっています。労働者一人一日の賃金が一デナリオンですから、ほぼ一年分の賃金に匹敵する高価さです。弟子たちは、

『それを一瞬して使い果たす等、何と

思慮に欠けたことをするのか、何と言う

事をするのだ』

と怒りを顕わにしています。

時は過越祭を前にしています。この時期エルサレム神殿には、貧しい巡礼者も沢山集まって来ます。この時期、彼らに施しをする事が奨励されていました。弟子たちはとても合理的で、正しい事を言っているかに見えますが、そこに、**全く愛がありません。愛とは与えること、犠牲を厭わない事**です。イエス様は自分の命を与えて、弟子たちを、そして全人類を救いたい、十字架に架かろうとしておられるのです。弟子たちはそんな大きな愛の価値が分からず、目の前の計算に心を奪われていました。

命をも惜しまず、愛を与えようとしておられるイエス様だけが、この女性の真実な愛を理解されました。10節に

「イエスはこれを知って言われた。

『何故この人を困らせるのか。私に良いことをしてくれたのだ。貧しい人々は何時もあなた達と一緒に居るが、私は何時も一緒にいる訳ではない』

と諭されました。

私達は、本当に自己中心で、自分にしか関心が無く、そんな心のフィルターで、全ての事を見失ってしまいます。女性のイエス様に対する、深い愛の洞察、こうせずにはいられなかった、イエス様への心の痛みを、弟子たちは、持っていませんでした。弟子たちは貧しい人々に対して、一体どれ程の痛みを、日常に感じていたのでしょうか。それは私達も同じです。ウクライナの人々の苦しみ、世界中で迫害に遭っている人々の苦しみ、飢餓に苦しんでいる人々の苦しみ、一応は思い、

「神様助けてください」

と祈りますが、そのために自分に、どんな犠牲を課しているのでしょうか。弟子たちは自分では、何の犠牲も払う事無く、女性を非難しました。

そんな彼らは、今、しなければならない、最も大切な事を見失っていました。イエス様は、
「わたしはいつも一緒にいるわけではない。
この人はわたしの体に香油を注いで、わたしを葬る準備をしてくれた」

と、イエス様が、彼女のために、言い開きをしてくださいました。女性は弟子たちに対して、

『あなた達は、どうしてイエス様の御苦しみがわからないの。いま、イエス様にできる限りのことをしなければ、後で、時間は戻って来ません。』

『今しか無いのに、どうしてそれが分からないの』

と言いたかったでしょう。

しかし彼女はその事をイエス様にお委ねしました。その時、イエス様が、その行為に彼女の思い以上の大きな意味付けをして言い開きをしてくださいました。感情にまかせて言い合いを

するのではなく、イエス様に言い開きをしていただけの者になりたいものです。弟子たちは後の日に、その全ての意味を知って、恥じ入ったことでしょう。

『後にならなければ分からない』

それが私達人間の悲しさです。

イエス様は13節に、

「はっきりしておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」

と言われました。受難節に、

『この人のしたことを聞いた私たちが今、しなければならぬことは何でしょうか』

イエス様は、私達の罪のために、十字架に向かわれるのに、イエス様にだけ十字架の痛みを押しつけて、自分は心の痛みを感じない、この罪を悔い改め、この女性のように、

『イエス様の御苦しみを感じ、その愛に答える事の出来る心にしてください』

と、祈り求めて行くことではないでしょうか。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様

イエス様の十字架の贖いを頂きながら、イエス様の十字架に心からの痛みを持たない、この深い罪をお赦してください。ご聖霊が内住くださり、頑な心を砕き、イエス様への愛に溢れさせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。

アーメン。